Śaṅkara の prasaṃkhyāna 説批判

波多江博子

Śaṅkara (Ś) によれば、輪廻とは brahman と ātman とが同一であるということを知らない無明 (avidyā) にほかならず、[1] 解脱とはこの無明を滅すること、[2] 即ち、brahman と ātman とは同一であると理解することである。従って、解脱手段は無明を滅するものでなければならない、と考えられる。そこで、明知[3] (vidyā)、即ち、brahman と ātman とは同一であるという brahman の知識 (brahmajñāna) こそが解脱手段なのである。この解脱手段である brahman の知識は「汝はそれなり」(tat tvam asi) という聖句のみから、得られる、とŚ は考えている。ところで、ātman は不変・常住[4] (kūṭasthanitya) であり、常に解脱したもの[5] (nityamukta)、即ち、輪廻しないもの[6] (asaṃsārin) である。つまり、ātman は brahman と同一なのである。しかし、無明のために、ātman はあたかも輪廻するものであるかのように見なされ、brahman とは異なると考えられている。無明のために、ātman が brahman と同一であるということを知らない人は、川を渡った十人の少年たちの話[7]と同様に、「汝はそれなり」という聖句から直ちに、ātman と brahman とは同一であると理解するのである。このように、「汝はそれなり」という聖句のみから得られた brahman の知識によって解脱することができるのであるから、解脱のためには、知識のみが必要であり、行為は全く必要ではない、とŚ は主張している。

このŚ の見解に対して、解脱のためには、知識も行為も共に必要であるとする知行併合論者の或る者は、[8]「解脱手段である brahman の知識は prasaṃkhyāna によって成就される」という prasaṃkhyāna 説を唱えている。[9] brahman の知識は、Ś が説くように、「汝はそれなり」という聖句から直接生じるものではなく、prasaṃkhyāna から生じるものである。それ故に、brahma と ātman とは同一であると理解するまで、Veda 聖典の命令にもとづいて、prasaṃkhyāna を実践するべきである。或る知行併合論者は、prasaṃkhyāna という一種の行為が解脱手段である brahman の知識を獲得するために必要不可欠なものである、と考えていたのである。

そこで、次のように、Ś は言う。

それはそのようではない、というのは、諸 Upaniṣad が「これではない、これではない」で終っているからである。行為によって成就されるものは、Veda 聖典の前半において聞かれる。解脱は、常に成就されているから、(行為によって成就されるもの) ではない。[10] [Upadeśasāhasrī (Upad) I, 18, 19]

つまり、「解脱手段である brahman の知識は prasaṃkhyāna によって成就される」という或る知行併合論者の見解を、Ś は論破しているのである。何故ならば、諸 Upaniṣad は、「これではない、これではない」という言葉で終っており、prasaṃkhyāna 等の行為を命令していないからである。行為によって成就されるものは、Veda 聖典の前半、即ち、祭事部 (karma-kāṇḍa) において述べられている。しかし、知識部 (jñāna-kāṇḍa) である Upaniṣad にお

いて述べられている解脱は、常に成就されているから、行為によって成就されるものではないのである。

「常に成就されている」(nityasiddha) という語は、Upad においては、この箇所 (I, 18, 19) で用いられているだけであるが、Ś の Brahmasūtra bhāṣya (BSBh) においては度々用いられている。I, 1, 5; I, 1, 20; IV, 4, 17; IV, 4, 18 においては、īśvara (あるいは、parameśvara) という語と共に用いられ、īśvara の形容語として、その性質を表わしている。īśvara は「常に完成した」ものである、と述べられている。また、nityasiddhasvabhāva (III, 4, 52), nityasiddhaniḥśreya (IV, 3, 14), nityasiddhanirvāṇa (IV, 4, 22) という複合語の形で用いられている。これらの場合には、nityasiddha は、後分の名詞 svabhāva, niḥśreya, nirvāṇa をそれぞれ形容している。つまり、svabhāva が「常に確立している」という意味であり、niḥśreya および nirvāṇa が「常に完成している」ということを表わしているのである。さらに、II, 2, 10 において二回現われる artho nityasiddha eva においては、artha が正に「常に存在している」という意味で、nityasiddha は使われている。このように、Ś の BSBh において使用されている「常に成就されている」(nityasiddha) という語は、何か或るものによって作られたり、変化させられたりすることなく、「常に完成しており」、「常に確立しており」、また、何か或るものによって生じさせられたり、滅されたりすることなく、「常に存在している」という意味で使用されている、と言うことができると思われる。

Upad においても、同様の意味で使用されているのであろう。解脱が「常に成就されている」というのは、解脱は、何か或るものによって、作られたり、変化させられたり、生じさせられたり、滅されたりするのではなく、「常に完成しており、常に確立しており、常に存在している」ということである。

ところで、行為の結果は、作られたり、得られたり、変化したり、浄化されたりするもの、[11] 即ち、無常なもの[12]である。そこで、もし、解脱が、或る知行併合論者が説くように、prasaṃkhyāna という行為によって成就されるならば、解脱は無常なものであろう。しかし、解脱は、無常なものではなく、常住なものであり、常に成就されているのである。従って、解脱は行為によって成就されるものではない、と言うことができるのである。

1 avidyāmātra eva...saṃsāro'stu (Upad I, 18, 45b).

2 tannāśo mokṣa ucyate [tan=avidyā] (Upad I, 17, 7b).

3 vidyaivājñānahānāya (Upad I, 1, 6a).

4 Upad II, 2, 73; 2, 84; 2, 93; 2, 101; 2, 103; 2, 108; 2, 109.

5 Upad I, 11, 7; 12, 11; 13, 3; 13, 11; 13, 16; 14, 37; 18, 3; 18, 179; 18, 188.

6 Upad II, 1, 8; 1, 25; 1, 44; 2, 50.

7 Upad I, 18, 170; 172; 173; 174; 187; 190; 199. 前田専学博士「ヴェーダーンタの哲学」二五九頁に詳述されている。

8 Upad I, 1, 8-11ab.　9 Upad I, 18, 9-18.

10 naitad evaṃ rahasyānāṃ netinetyavasānataḥ / kriyāsādhyaṃ purā śrāvyaṃ na mokṣo nityasiddhataḥ // (Upad I, 17, 49ab).

11 utpādyāpyavikāryāṇi saṃskāryaṃ da kryāphalam (Upad I, 17, 49ab).

12 karmakaryas...anityaḥ (Upad I, 17, 8a).

(九州大学大学院)